

A Historical Study of the rGyarong Adverbial Prefixes

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長野, 泰彦 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00004422 |

嘉戎語の動作の様態を示す接辞

長 野 泰 彦*

A Historical Study of the rGyarong Adverbial Prefixes

Yasuhiko NAGANO

rGyarong is a Tibeto-Burman language, spoken in the northwestern region of Sichuan Province, China. Because of the striking similarity of some words to the orthography of Tibetan and its complicated morphological processes, the language has long attracted scholarly attention. In no previous study, however, has there been any clear-cut description of the language's complexity—the verb system, above all, shows such a puzzling structure that no earlier works on rGyarong seem to have succeeded in analyzing it convincingly.

Neither has the historical/genetic position of rGyarong been well-elucidated. It has been classified in the Tibetan group simply because of the similarity of a limited number of rGyarong words to Written Tibetan, whereas the affiliation of the rest of the lexicon has gone unstudied. My purpose in writing this paper is to counteract this bias.

The most puzzling part of the rGyarong morphological processes is the final verb phrase, which has the following general structure: (ka)-(P1)-P2-P3-(P4)-ROOT-(S1)-S2, where seven affixes play significant roles to specify agent(s), patient(s), goal(s), beneficiary, aspect, direction of act, manner of act, and so on.

This paper describes the adverbial prefixes which appear in the P4 position: causative markers (sə-, syə-, wa-, rə-), a mutual act marker (ngə-), repetitive act markers (ra- and na-), an automatic/uncontrollable act marker (mə-), an objectivizer (sa-),

* 国立民族学博物館第1研究部

小稿のアウトラインは、カリフォルニア大学(バークレイ)に提出した学位論文の一部 [NAGANO 1983: 74-89, 244-252] に示した。その後多くの方々から寄せられた批判を参考に改訂したのがこの小文である。論文審査の労をとられた James A. Matisoff, Wallace L. Chafe, 張珉 3 教授と、コメントを下された西田龍雄, 北村 甫, 西 義郎, Graham W. Thurgood, Paul K. Benedict, David Bradley, Scott DeLancey 諸教授に対し、深甚の謝意を表す。

a progressive marker (nə-) and a reflexive marker (nə-). After the description of these affixes, their historical origin is studied through comparison with several genetically related languages and a tentative positioning of them among all Tibeto-Burman languages is proposed.

| | |
|---------|--------|
| 0. はじめに | 2. 比較 |
| 1. 記述 | 3. むすび |

0. はじめに

嘉戎（ギャロン：rGyarong）語は、中国四川省西北部、羌族の西隣りの地域に話されるチベット・ビルマ（TB）系の言語で、TB 諸語の比較研究に重要な役割を果たす媒介言語（link language）¹⁾ のひとつである。

TB 諸語は、Grierson, Konow, Wolfenden, Shafer 等の研究を経て、現在では、チベット語群、ロロ・ビルマ語群、チン語群、ボド・ナガ語群の4つに系統分類されるに至っている²⁾ が、これら4語群のいずれにも帰属しない幾つかの言語がある。これらの言葉は例えば、語の音形式はグループ A と対応がつくが、形態手続や統辞論はグループ B に近いとか、語の形式、形態手続、統辞法の全て又は一部が、複数のグループと対応する等、様々の仕方と程度において、語群間、或いはもうひとつ下位の語系間の歴史的橋渡し役を演ずる。「リンク」という命名法はここから来ている。

これらのリンクランゲージは一般に複雑な形態統辞論の手続、又はその reflex としての高度に統合的な音節構造を持ち、語群や語系間の関係を整合的に説明するのに有用であるのみならず、チベット・ビルマ共通祖語（PTB）段階での音形式や統辞法を再構成するに当って、多くの示唆を与えてくれるのである。もとより、言語の史的研究方法の本筋は「比較」であるけれども、語彙の音韻対応通則の設定を第一義とする狭義の「比較方法」のみによって、TB 諸語の歴史を明らかにすることは困難である。なぜならば、この方法は、各構成言語が独自の発展を遂げたインド・ヨーロッパ語族という特殊環境の中で確立されたものであり、そういった環境での比較の結果導き出される対応はその言語群の歴史関係の証明に実証性を発揮するが、民族が移動と

1) 西田 [1978] のターミノロジーに従う。

2) この4分法を一貫してとってきたのは西田龍雄教授で、小文での分類、下位分類は西田方式によっている。Benedict と Matisoff の最近の考え方では、この4つに加え、カレン語群を認める（両博士からの私信による）。

接触を繰り返してきた TB 諸語にあっては、その方法の証明力には自ら限界がある。

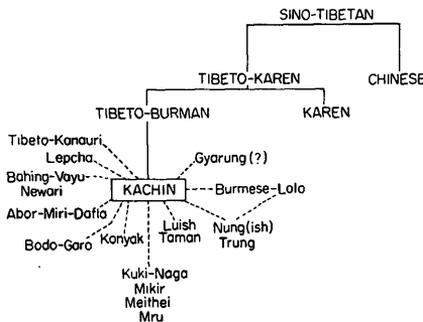
これを打開するため、近年いろいろな角度からの類型論的、意味論的アプローチが提出され、それなりに見るべき業績も多いが、私は形態統辞的手続の比較研究と在来の比較方法を平行させるのが最も確実な研究態度ではないかと考えている。

この意味において、高度の形態統辞的手続を保持する媒介言語は、TB 諸語の史的研究にとって大変好ましい条件を備えた研究対象である。特に、4 語群全てに亘ってリンクの機能を有する嘉戎語、カチン語³⁾等は、これからの TB 研究の中心課題になってゆくものと思われる。ところが、これら媒介言語はその特徴的な音形式や形態的・統辞的手続の故に、特定の部分だけが抽出されて比較研究の材料に利用されることが多く、各言語の構造を踏まえたモノグラフや分析は少ない。

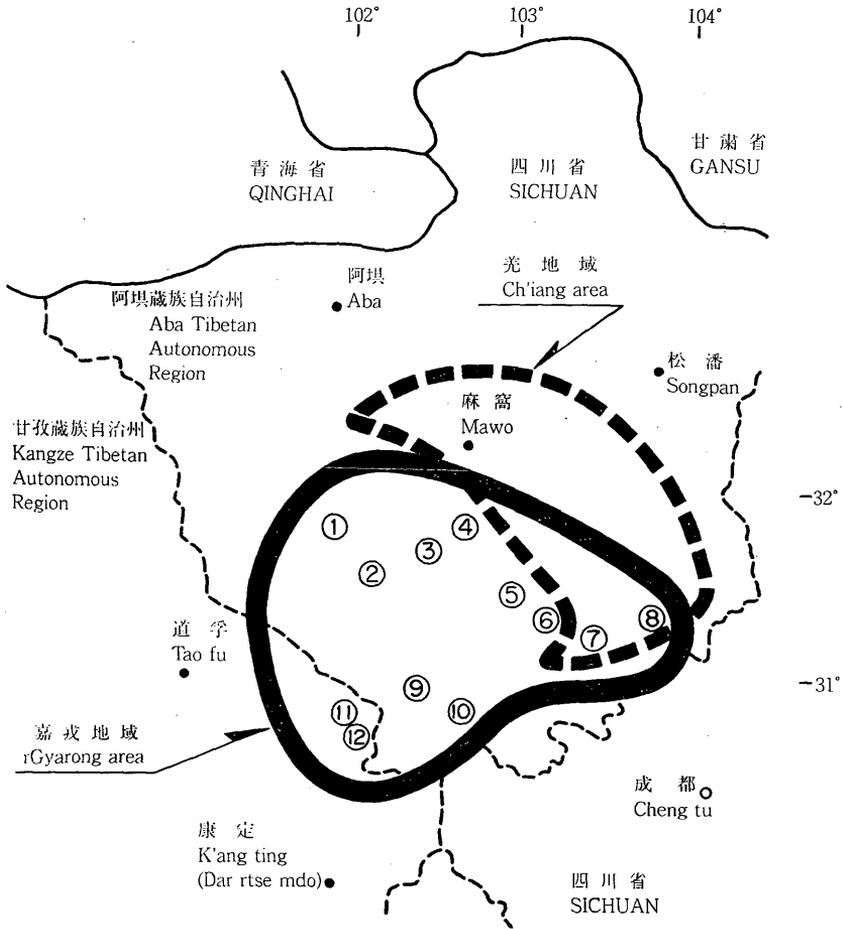
筆者は嘉戎語のインフォーマントを得て実地調査を行なう機会を持つことができたので、まずこの媒介言語の形態統辞的プロセスの最も OVERT なあらわれである接辞について、逐次研究成果を公表してゆきたいと思う。嘉戎語で接辞が最も productive に機能するのは動詞句に於いてであり、この句構造が PTB での接辞体系や統語法と密接に関連していると考えられるので、小文ではそこに用いられる接辞の内、動作の様態を表わすものの記述と分析を示し、その来源と歴史的意味についての管見を述べることにしたい。尚、動作の方向を示す接辞については、長野 [1984] に論じた。

0.1 嘉戎語の話される地域は地図中の実線で囲まれた部分で、一部羌族^{チヤン}の居住地

3) リンクという言葉は使っていないけれども Wolfenden や Benedict はカチン語の形態手続に注目し、これを種々の言語のそれと比較しようと試みている。特に Benedict の系統図(下図参照)は、カチン語に全ての源があるように描かれていて、系統を説明するものとしては奇異であるが、リンクランゲージを重視する立場はよく表現されている。私見では、嘉戎、カチン、羌、ルジャイ、ミキル、メイテイ等の媒介言語を衛星状に配した図が現在の研究状況を示すものとして適切であると思う。



[BENEDICT 1972: 6]



- | | | | |
|-------------------------------|--|------|-----------|
| ① 綿斯甲 | Khro skyabs (Edgar 1932の記す Chos-kia) | ⑦ 理番 | Li fan |
| ② 大金川 | Rab brtan | ⑧ 瓦寺 | Wa si |
| ③ 卓克基 | lCog rtse | ⑨ 債拉 | bTsan lha |
| ④ 梭磨 | So mang | ⑩ — | Hanniu |
| ⑤ 子達 | Tzu ta | ⑪ 巴地 | Bra sti |
| ⑥ 雜谷 (雜古(腦)) (=Tsa ku nao) | Tsha kho | ⑫ 丹巴 | bs'tan pa |

[CHANG 1968; 金鵬 *et al.* 1957] をもとに著者作成。

①~⑫の地名表記は『四川通志』『松潘縣志』及びW.T.正書法による。

地 図

域とオーバーラップしている。その西側と北側はチベット族によって占められる。

人口は約9万人で⁴⁾、^{ツァコ}雑古、^{チョクツェー}卓克基に集中している。rGyarong という名称は、チベット人による他称で、チベット史書に言うギェーモロン（文語チベット語【以下WTと略す】rGyal mo rong:「王女の谷」）の略、自称は /kə ru/ である。

嘉戎族の歴史はよく分からない部分が多いのだが、敦煌出土チベット語文献研究の最近の著しい進歩により、チベット史書や中国正史との付き合い合わせが可能になり、ようやくその輪郭だけは浮かび上がってきたように思われる。それらを総合すると、嘉戎王家はもともと吐蕃王国成立期に西チベットに力のあったシャンシュン国の支配層の出自であり、女国（シャンシュン・トェ：WT Zhang zhung stod）に対し、金川・雑谷（雑古）を中心とする「東」女国と白蘭を建てた。統治組織として18の領主を置き（12世紀頃）、チベット、中国双方から政治的には独立の立場をとっていた。この体制は13世ダライラマ⁵⁾の時代迄続いた。宗教の面ではこの地域はボン教⁶⁾の本拠地であったが、チベット仏教改革派の擡頭に伴い、漸次チベット仏教が優勢となり、これを通じて多くのチベット文化を受容することになる。言葉の面でもチベット語を綴字法通りに借用する⁷⁾など、相当の接触があった。

この間の史的考証については、山口 [1969, 1971, 1983] を参照されたい。

0.2 インフォーマントは、チャンバ・ラプキェイ師とギャロン・ジャムブム氏である。両氏とも嘉戎語の native speaker で、ほぼ同年輩、出身地も同じ卓克基（チ

4) 林 [1982] や瞿 [1984] によると、人々は「10多万」となっている。筆者の数字は古いモノグラフやインフォーマントの話を総合し、2%の出生増加率を乗じたものであるが、それにしても相当の差がある。林や瞿の挙げる数字は、bilingualの人々をも含めたものと推察される。彼らが国勢統計によった人口を出しているとするれば、筆者は直ちにこの数値を訂正する用意がある。

5) WT Thub-bstan rgya-mtsho トゥブテン・ギャムツォ 1876-1933。河口慧海、多田等観、青木文教らの入蔵時は、このダライラマの治世であった。

6) チベット在来の宗教といわれるが、これも疑わしい。ボン教自体の伝承によれば、この宗教は西から来たことになっている。又、女国勢力の東遷に従って、ボン教も東へ移ったことは文献により明らかになっている。cf. 山口瑞鳳「女国の部族名 dMu—Bon 教東遷の説明にかえて」『日本西藏学会々報』18: 2-6。

7) WT 正書法はルートの前後に長い子音結合があり、嘉戎語内の WT 借用語ではこれがそのまま発音される。一方、後に詳しく記す通り、嘉戎語（の、少なくともその動詞句）には多くの接辞が付き得る構造があるため、一部の語彙では嘉戎形式と WT 形式が、対応ではなく、一致を示したり、両形式の本来の姿が区別できなくなったりしている例がかなりある。このため、嘉戎語はチベット語に系統的に最も近いことば、或いはチベット語の古形を保つことばと見做されてきた。

しかし、入念な分析作業によって、この考え方は誤りであることを筆者は示すことに成功したと思う [NAGANO 1983; 長野 1984]。嘉戎語動詞語幹に関する限り、それはむしろボド・ナガ語群——特にアボル、ミリ、ダフラ——と系統関係があり、チベット語群の構成メンバーにはなり得ないと考えている。

ョクツェー：WT lCog rtse) である。2氏とも1959年のチベット動乱の際、インドに逃れた。チャンバ師は現在インド、カルナータカ州バイラクッペにあるセラ寺⁸⁾の僧、ジャムブム氏はウッタール・プラデシュに住んでチベット絨毯の卸商を営んでいたが、筆者との調査後、嘉戎に戻り、現在雑古郊外にいる。両氏の経歴と言語生活については、拙稿 [長野 1984] に詳しい。

このような調査の意義を理解し、辛抱強く協力して下さった2氏に対し、心から御礼申し上げたい。尚、調査はチベット語を媒体として行なった。

0.3 略号表 (及び主として依拠した資料)

| | | | |
|----------------|---|-----------|-------------------------|
| Adj. | adjective (形容詞) | | |
| Adv. | adverb (副詞) | | |
| ADV | adverbializer (副詞化の標識) | | |
| agt. | agent (動作者) | | |
| AO | Ao 語 | | [CLARK 1893] |
| AUX | auxiliary verb (助動詞) | | |
| AUX: E | auxiliary verb of existence (存在の助動詞) | | |
| AUX: S | auxiliary verb of statement (叙述の助動詞) | | |
| AUX: SE | auxiliary verr of explanatory statement (説明的叙述の助動詞) | | |
| bnf. | beneficiary (受益者) | | |
| BO | Bodo 語 | | [BURLING 1959, 1967] |
| C | consonant (子音) | | |
| C _f | final consonant (末子音) | | |
| C _i | initial consonant (頭子音) | | |
| CAUS | causative | | |
| CH | Ch'iang (羌) 語 | | |
| CH [LF] | Ch'iang [Lo fu chai] 語 | 羌 語 蘿蔔寨方言 | [聞 1943c] |
| CH [LI] | Ch'iang [Li ping] 語 | 羌 語 里坪方言 | [聞 1943c] |
| CH [MA] | Ch'iang [Ma wu] 語 | 羌 語 麻窩方言 | [孫 1981a, 1981b] |
| CH [TP] | Ch'iang [T'ao p'ing] 語 | 羌 語 桃坪方言 | [孫 1981a, 1981b] |

8) チベットのラサにも現存するが、活動状況は未詳。

この学寮は出身地別で、その中では方言を話す伝統が古くからあり、インド内のセラ寺でもこれが守られている。嘉戎学寮では、従って、年長の僧から新規に入学した少年僧に至る迄、嘉戎語を話す。

| | | | |
|--------|----------------------------------|-----------|-------------------------------|
| CH [W] | Ch'iang [Wa si] 語 | 羌 語 瓦寺方言 | [聞 1943a] |
| DIR | directive (方向接辞) | | |
| DL | dual (双数) | | |
| goa. | goal (ゴール) | | |
| G | glide (介音) | | |
| GA | rGyarong [Ganli] 語 | 嘉戎語 崗理方言 | [林 1982] |
| GC | rGyarong [lCog rtse] 語 | 嘉戎語 卓克基方言 | 長野 |
| GH | rGyarong [Kham-to] 語 | 嘉戎語 カムト方言 | [WOLFENDEN 1936] |
| GK | rGyarong [Tsha kho=Tsa ku nao] 語 | 嘉戎語 雜古方言 | [金鵬 1949] |
| GM | rGyarong [So mang=Suo mo] 語 | 嘉戎語 梭磨方言 | [金鵬 <i>et al.</i> 1957, 1958] |
| GN | rGyarong [Hanniu] 語 | 嘉戎語 ハニウ方言 | [ROSTHORN 1897] |
| GP | rGyarong [Bra sti=Pa ti] 語 | 嘉戎語 巴地方言 | [ROSTHORN 1897] |
| GS | rGyarong [Chos kia] 語 | 嘉戎語 綽斯甲方言 | [EDGAR 1932] |
| GT | rGyarong [bTsan lha] 語 | 嘉戎語 贊拉方言 | 長野 |
| GW | rGyarong [Wa si=Waszu] 語 | 嘉戎語 瓦寺方言 | [ROSTHORN 1897] |
| GZ | rGyarong [Tzu ta] 語 | 嘉戎語 子達方言 | [CHANG 1968] |
| HON | honorifics (敬語) | | |
| INF | infinitive (不定法) | | |
| IPF | imperfect (未完了態) | | |
| IRG | interrogative (疑問詞) | | |
| JG | Jinghpaw 語=Kachin 語 | | |
| LA | Laizo Chin 語=Zahao 語 | | [OSBURNE 1975] |
| LF | =CH [LF] | | |
| LH | Lahu 語 | | [MATISOFF 1973b] |
| LI | =CH [LI] | | |
| LOC | locative (於格) | | |
| LSI | | | [GRIERSON (ed.) 1909] |
| LU | Lushai 語 | | [LORRAIN 1940] |
| MK | Mikir 語 | | [WALKER 1925] |
| MK [G] | Mikir 語 | | [GRÜSSNER 1982] |
| N | noun (名詞) | | |

| | | |
|------------------|---|------------------------------------|
| NP | noun phrase (名詞句) | |
| NU | Nung 語 | [BARNARD 1934; 孫 1982] |
| NW | Newar 語 | [MALLA 1981] |
| PFT | perfect (完了態) | |
| P | prefix (接頭辞) | |
| PG | Proto-rGyarong (ギャロン祖語) | |
| PL | plural (複数) | |
| PLB | Proto-Lolo-Burmese (ロロ・ビルマ祖語) | [MATISOFF 1972a; THURGOOD 1977] |
| PRO | progressive (進行態) | |
| PTB | Proto-Tibeto-Burman (チベット・ビルマ祖語) | [BENEDICT 1972] |
| ptt. | patient (受動者) | |
| RW | Rawang 語=NU | [BARNARD 1934] |
| S | suffix (接尾辞) | |
| SG | singular (単数) | |
| SUB | substantival marker (ニュートラルな名詞を指示する接頭辞) | |
| TB | Tibeto-Burman (チベット・ビルマ) | |
| TR | Trung 語 | [Lo 1945; 孫 1982] |
| TSF | tensifier (アスペクトを一段遠い段階へずらす標識: cf. l.l.) | |
| V | vowel (母音) | |
| Vb | verb (動詞) | |
| VP | verb phrase (動詞句) | |
| VP _f | verb phrase: final | |
| VP _{nf} | verb phrase: non-final (VP _f の前に立つ VP: cf. l.l.) | |
| WT | Written Tibetan (文語チベット語) | [JÄSCHKE 1968] |

1. 記 述

嘉戎語卓克基方言 (GC) の動詞句において productive⁹⁾ に機能する、動作の様態を表わす接辞の記述を本章に示すが、特に註記しない限り、例は全て、筆者の实地調査にもとづくものである。同方言の音論と表記法は、[NAGANO 1983: 32-35] に詳

9) productive というのは新語を造る能力があるという意味である。

しい¹⁰⁾。

嘉戎語には18の方言があると言われる。これはこの地域が統治組織上18に分割されていた¹¹⁾ ことによるのであって、調査によって18の方言に分類されているという意味ではない。今の処何らかの形で言語の記録があるのは、地図に示した12地点のみであり、したがってここに記述する卓克基方言が嘉戎語全体の中で、どのような位置を占めるものかは未だ分からない。しかし乍ら、動詞句の構成メンバーのあり方やその構造に限ってみれば、北部方言がより複雑で且つ古い層を代表すると考えられ、南下するに従い、単純化する。卓克基方言は北部方言の中でも最もよく接辞のセットが揃っており、^{ソマン}梭磨方言 (GM) がそれに次ぐ。

1.1 嘉戎語の文と動詞句の一般的構造について概説しておく。

嘉戎語の文は単文又は複文であって、一般的に次のような形式を呈する。

$$[(NP) + VP_{\text{non-final}}]^n (\text{PARTICLE}) [(NP) + VP_{\text{final}}] (\text{AUX}).$$

NP は名詞句、VP は動詞句、n は 0, 1 又は 2 であり、括弧を付した部分はオプションである。VP_{non-final} と VP_{final} は助辞で結ばれることがあり、VP_{final} は後に叙述又は存在の助動詞を伴うことがある。VP_{non-final} は動詞句であることのマーカー ka- と語幹のみから成り、様々の接辞が機能するのは VP_{final} においてであるので、小稿では VP_{final} を主たる考察の対象とする。

VP_{final} は次の一般的構造を有する。

$$VP_{\text{final}} \longrightarrow (ka)-(P1)-P2-P3-(P4)-\text{ROOT}-(S1)-S2.$$

動詞語幹の前に 5 つの接頭辞、後に 2 つの接尾辞が付き得る構造になっており、こ

10) 簡単に音論に触れておこう。子音要素として次の32種を認める：/p, ph, b; t, th, d; tr, trh, dr; k, kh, g; ?; ts, tsh, dz; c, ch, j; s, z; sy, zy; h; m, n, ny, ng; l, r; w, y/。この内、tr, trh 及び dr は retroflex, sy と zy は alveopalatal fricative である。これらの他に閉鎖音と破擦音に対する前鼻音 N があるが、これは assimilation を起こし、且つ syllabic である。歴史的にみると、この音素は、決して assimilation を起こさない別の prenasal m- と対をなす。又、上記の有声閉鎖音と有声破擦音は、WT からの借用を除き、全て prefix をとる。

母音要素として次の 6 種を認める：/a, i, u, e, o, ə/。母音の長短は弁別的でない。

声調もまた弁別的でない。金鷲 *et al.* の記述 [1957, 1958] では声調が弁別特徴として機能する例を挙げているが、よく検討するとそれらはミニマルペアになっていない。Topicalizer と有標の位置に立つ方向接辞は、step-up tone のような極めて高いピッチを有するが、これがピッチアクセントによる区別のある唯一の部分である。これについては拙稿 [NAGANO 1983: 24-26] を参照されたい。

11) 18領主制については、史書『ザムリン・ゲーシュー』(WT Dzam-gling rgyas-bshad) に詳しい。

れ全体で1語をなす。括弧で囲んだ接辞は義務的でない。接頭辞の基本的な音節構造は CV⁻¹²⁾、接尾辞のそれは -C、語幹のそれは (C)C_i(G)V(C_f)である (C_iは語頭子音、Gは glide で、-r-, -l-, -w-, -y-の何れか、C_fは末子音)。

ka- は VP マーカーであり、VP_{non-final} では義務的であるが、VP_{final} ではオプションである。

P1 は単一の形態素 ke- であり、P2 で指定されるアスペクト (完了態と未完了態) をより遠い段階へずらす機能を持つ。つまり、未完了のアスペクトに ke- が接頭されると未来を、完了のアスペクトと共に用いられると単純過去又は大過去に近い意味を表わす。インフォーマントの意識ではテンスマーカーなわけだが、チベット・ビルマ諸語に時制は一般に認められないので、ke- はアスペクトを強める役割を果たすものと解釈したい。

P2 は上に触れた通り、アスペクトマーカーで、完了態と未完了態を区別する。未完了は \emptyset -、完了は na- で指定される。この2つのマーカーの他に、動作の方向を示す接辞 (directive) 13種類もこの位置に立つ。そしてこれらの directive は常に完了のアスペクトを指定し、本来の完了態マーカー na- と「相補的分布」を示す。つまり、方向接辞は完了態マーカーとしての機能を併持しており、未完了態においては、動作の方向は動詞句の中には示されないのである。例えば、例文 (1)(3)(5a) の ta- は「山に関して上へ」の間接情報を示し、(1a) の to- は上と同じ意の直接情報を示すが、同時に完了のアスペクトをも表わす。

但し、VP_{final} の前に未完了態を示す副詞(句)がある場合、VP 内に方向接辞があっても、それはアスペクトマーカーとしての意味を失なう。又、そのような副詞(句)を置かずに未完了態で動作の方向を示さねばならないときは、P2 を ke- の前という有標の位置に立てる。

尚、この方向接辞については拙稿 [長野 1984] を参照されたい。

P3 と S2 は人称接辞で、常にセットとして義務的に現れる。自動詞文と他動詞文でその組み合わせは異なるけれども、動作者、受動者、ゴール、受益者等の情報が人称と数を伴って詳細に指定される仕組みになっている。換言すれば、「誰が誰を/に/のために/へ」等々の関係が VP 内部で指示される訳で、いわば文が句の中に実現されているのである。勿論、動作者や受動者が VP 外で明示されることも排除されない。一見 redundant なシステムであるが、これはおそらく嘉戎語には能格と於格を

12) この CV における V は普通の発話では無声化する。又、P3 接辞の一部 (他動詞文で、agt., ptt., goal, bnf. 等が形式として文中に現れるとき) では、{CV-CV} の基底形をもち、最後の -V が無声化して CVC の音節構造を呈する。

除く格助詞がないことと関連があり、チベット・ビルマ祖語段階での統辞法を考える上で重要な示唆を与えてくれる。

P4 は動作の様態を示す接辞である。これには相互動作、連続動作、自動的動作、使役法、進行形などのマーカーが含まれる。使役や進行は「様態」と言うには文法的すぎるが、一方、伝統的な術語 *adverbial affix* では嘉戎語の接辞全般に及んでしまうため、一応 P4 接辞は *manner* を表わすものとしておく。

S1 は派生的接辞 *-s* であり、*process verb*¹³⁾ のみに接尾して完了のAspectを示す。この形態素は WT *-s* と同源だが、派生し得るのが過程動詞である点で、WT *-s* よりはるかに非生産的である。

1.2 動作の様態を示す接辞には、使役のマーク、自動的（で且つ意志で制御できない）動作のマーカー、相互動作マーカー、連続（又は反覆）動作のマーカー、動作を客体化するマーカー、及び進行形マーカーの6種がある。以下に適当な例文を付して説明するが、その記述様式は次の通りである。

- 1行目 嘉戎語（卓克基方言）文
- 2行目 VP の基底形 (*underlying form*)
- 3行目 語又は形態素ごとの意味
- 4行目 和訳

嘉戎語文、特にその VP 内には、多くの形態音素論的なルールが働いており、1行目はその結果であって、これだけでは接辞の分節が必ずしも自明とは言えないので、それらのルールが作動する前の形式 (*underlying form*) を2行目に示す。3行目の *interlinear* な訳は種々の便宜を考慮し、英語と略号によって示す。略号表は0.3にある。

1.2.1 使役法 (*causative: CAUS* と略す) を示す接辞には *sə-*, *syə-*, *rə-*, *wa-* の4種を算える。この内、*sə-* と *syə-* はチベット・ビルマ祖語の **s-* に来源を求めることができ、*rə-* と *wa-* についても同源と思われる接辞を他の幾つかの言語に発見することが可能である。これらの接辞は、P4 の位置に現れて *CAUS* の意味を指定するが、このような *productive* なものの他に、より古い時代に既に動詞語幹に語彙化 (*lexicalize*) したものもある。これについては1.2.8と2章に触れる所がある。

1.2.11 *sə-*

この接頭辞は *CAUS* マーカーとしても最も頻繁に用いられるもので、通常自動詞

13) この術語はチェイフ [1974: 97-108] に従う。

(VI) を他動詞 (VT) に転換する。この接辞の母音は語幹の母音に調和し、ルートの子音母音が /e/ [front, unrounded] の場合は -e- に、/u/ [low, back, rounded] の場合は -u- に、それぞれ変わり、その他の場合は -ə- のままである。

VI/VT の典型的なコントラストは次の5つのペアによく現れている。

- (1) bi-syer te-rmi ke-ta-key-dzu.
 {ke-ta-kə-yi-dzu}
 yesterday man TSF-PFT-3PL-general movement-gather
 昨日人々が集まった。
- (1a) nga bi-syer te-rmi ke-to-sey-dzung ko.
 {ke-to-sə-yi-dzu-ng}
 1SG yesterday man TSF-PFT-CAUS-gather-1SG AUX: S
 私は昨日人を集めた。
- (2) nyi-gyo nyi-mnyak ro mə ngos.
 {ro}
 2PL your-eye wake IRG AUX: S
 おきますか?
- (2a) nga ta-pu wu-mnyak nə-sə-rong ko.
 {nə-sə-ro-ng}
 1SG child (his-) eye PFT-CAUS-wake-1SG AUX: S
 私はその子をおこした。
- (3) sytə wu-trhe wu-ŋguj ta-dok ta-ŋə-kyo-lo no-to.
 {wu-ŋgu-y} {ta-ŋə-kyo-lo}
 this tea of-in-LOC poison PFT-mutual act-mix AUX: E
 このお茶には毒が混っている。
- (3a) sytə wu-sman tə-gi wu-ŋguj tə-sə-kyo-low.
 {wu-ŋgu-y} {tə-sə-kyo-lo-w}
 this of-drug water of-in-LOC PFT-CAUS-mix-2SG
 この薬を水に混ぜなさい。
- (4) sytə wu-ta-si nə-gur-gur no-to.
 {nə-gur-gur}
 this of-stick PFT-bend AUX: E
 この棒は曲がっている。

- (4a) nga tə-ta-si ke-sə-gur-gur ko.
 {ke-sə-gur-gur}
 1SG stick TSF-CAUS-bend AUX: S

私は棒を曲げよう。

- (5) nga khyang ko.
 {khya-ng}
 1SG drunk AUX: S

私は酔うだろう (酔いそうだ)。

- (5a) wu-yo-ki te-rmi ta-sə-khyaw.
 {ta-sə-khya-w}
 3SG-ERG man PFT-CAUS-drunk-3SG

彼はその男を酔わせた。

(1) と (1a), (2) と (2a) を比べれば, sə- の役割は自明である。(3) と (3a) の語幹は *kyo-lo* であるが, (3) には P4 接辞として *ngə-* が出現している。これは後に述べる「相互動作」を表わすものだが, (3a) の他動詞文ではその代りに sə- が出る。*ngə-* は unitary root (接辞+語幹の組み合わせでルート扱いをすべきもの) の一部ではないので, 他動詞文においては sə- が *ngə* に優先するからである。

これに類する語幹対応の例を1つ挙げておこう。 *su-ksyot* (<{sə-ksyot}) は「教える」の意であるが, これは CAUS+*ksyot* (「習う」) という構成になっている。尤も, 現在では *ksyot* が「習う」の意で単独に用いられることはなく, *sye* (<「知る」) に置き換えられてはいるが……。

次に sə- が他動詞を2次の使役へ転換する例を検討しよう。次の6例文を参照されたい。

- (6) nga nga-nga ke-wang ko.
 {ke-wa-ng}
 1SG my-cloth TSF-put on-1SG AUX: S

私は着物を着よう。

- (6a) nga ta-pu wu-nga ke-sə-wang ko.
 {ke-sə-wa-ng}
 1SG child his-cloth TSF-CAUS-put on-1SG AUX: S

私はその子に着物を着せよう。

- (6b) nga ta-pu wu-Nga nga-pya ke-sə-wang ko.
 {ke-sə-wa-ng}
 ISG child his-cloth my-wife TSF-CAUS-put on-1SG AUX: S

私は家内にその子に衣服を着用させよう。

- (7) nga nga-Nga ke-nə-tang ko.
 {ke-nə-ta-ng}
 ISG my-cloth TSF-PFT-take off-1SG AUX: S

私は衣服を脱いだ。

- (7a) nga wu-Nga ke-nə-sə-tang ko.
 {ke-nə-sə-ta-ng}
 ISG his-cloth TSF-PFT-CAUS-take off-1SG AUX: S

私は彼の／に着物を脱がせた。

- (7b) nga wu-Nga nga-Ndri nə-sə-tang ko.
 {nə-sə-ta-ng}
 ISG his-cloth my-servant PFT-CAUS-take off-1SG AUX: S

私は召使にその子の着物を脱衣させた。

sə- は形容(動)詞を動詞化する機能をも持っている。例えば, *kte* (「大きい」)に, sə- を付して, *ka-sə-kte* を作ることができるが, これは「大きくする」「育てる」の意になる。sə- が形容(動)詞と共に生産的に働く例は少なく, *kte* の他に2つを算えるに過ぎない。

史的考証を経てルート内の s- がももとは sə-+形容(動)詞であったと考えられる例は幾つかある。例えば, 「修理する」は *ka-sna-skik* であるが, この内, *skik* は単独で「直す」の意を持っている。では *sna* は何か? これは現代嘉戎語では自立語でなく, 熟語表現にしか出現しないが, 歴史的には *s-na と分節でき, *s- は sə- 又は PTB の *s- と関連があり, 又, *na は「良い」の意である。*na が「良い」の意で単独で用いられることはないが, *ka-na-la* 「うれしい」などの複合語に残存している。又, 嘉戎語と系統関係がありそうな他の TB 言語には, *na* が「良い」の意の自立語として使われる例がある(例えば, ラフ語 *na* はその形容詞 *dà?* とダブレットをなす)ので, おそらく, **ka-sə-na* 「良くする」はかつては嘉戎語においてもノーマルな語構成であったに違いなく, これがどこかの段階で *skik* と複合語を形成し, それと共に **sə-na* は *sna* になって, その自立性を失ったと考えられる。

1.2.12 *syə-*

この接辞は CAUS マーカーである点では *sə-* と同じで、おそらくそれからの派生形式であるが、「助けて……させる」の意を表わす。

例えば次の3例を比べてみよう。

- (8) *nga ke-rwas ko.*
 {*ke-rwas-ng*}
 1SG TSF-rise-1SG AUX: S
 私は起きる。

- (8a) *nga wu-yo ke-sə-rwas ko.*
 {*ke-sə-rwas-ng*}
 1SG 3SG TSF-CAUS-rise-1SG AUX: S
 私は彼を起こす。

- (8b) *nga wu-yo ke-syə-rwas ko.*
 {*ke-syə-rwas-ng*}
 1SG 3SG TSF-CAUS-rise-1SG AUX: S
 私は彼を助け起こす (起きるのを助ける)。

(8) は自動詞文で、(8a) がその他動詞文で *sə-* がその converter になっている。これに対し、(8b) では *sə-* の代わりに *syə-* が現れ、幫助の意を明確にしている。

「借りる」「貸す」の対立も *syə-* によって表わすことができる。

- (9) *nga po-ngiy ke-nə-rngang ko.*
 {*ke-nə-rnga-ng*}
 1SG money TSF-PFT-borrow-1SG AUX: S
 私は金を借りた。

- (10) *nga po-ngiy ke-ni-syə-rngang ko.*
 {*ke-ni-syə-rnga-ng*}
 1SG money TSF-DIR (lower seat)-CAUS-borrow-1SG AUX: S
 私は金を貸した。

(10) に *sə-* ではなく、*syə-* が使われるのは、純然と「貸す」というよりも「貸してあげる」というニュアンスがあるからであろうか。又、(10) の P2 接辞には「下座」を示す *ni-* が現れているが、これは目下の者に貸してやるという (心理的) 方向を示している。

逆に, *syə-* が特に幫助の意なしに, 全く *sə-* と同じ CAUS としてのみ作動する例もある。*pki* は「隠れる」という VI であるが, その VT は *syə-pki* 「隠す」で, **sə-pki* という形式はない。又, *syə-chit* (「ぬれる」) と *syə-lot* (「道に迷う」) は何れも CAUS+形容詞の形を持つ複合語幹で, **chit* と **lot* の verbalizer としての役割を *syə-* が演ずる例である。**chit* と **lot* は自立的形容詞としては存在しないが, 嘉戎語他方言や羌語, ラワン語などとの比較から, 本来形容詞であったことが帰納される。

1.2.13 *rə-*

筆者のデータ中, *rə-* が CAUS マーカーである例は3つある。

「出る」は *ka-ksyut* で, これに対し, *ka-rə-ksyut* は「逐い出す」を意味する。「少ない」*ka-chak* に対する *ka-rə-chak* 「減らす」もパラレルな例と考えられよう。

「乾く」の語幹 *ram* に関連する形式は興味深い形態手続を見せてくれる。*ram*(VI) に対する VT 形式には *k-ram* と *p-ram* があり, 何れも「乾かす」の意を表わすが, *p-ram* は「曝涼」の場合にのみ用いられ, その他の場合は *k-ram* が使われる。ところが, この2つの語幹は単独で現れることは少なく, 多くの場合, *rə-kram* 及び *rə-pram* の形をとって出現する。つまり1つの VI 語幹に2つの CAUS マーカーが付く構造になっており, 意味は単に *ram* という VI が VT に convert されたものに過ぎない。何故このような二重の形態手続が発生するのか, 今の処よく分からないが, 嘉戎語^{ツァコ} 雜谷(雜古=雜古^{ツァク}脳)方言では *k-ram* が VI として用いられていることから判断すると, 卓克基方言でも *p-ram* と *k-ram* が *ram* の VT 形式ではあるが, 漸次これらが VI 形式に移行しつつあり, VT であることを明示するには何らかの CAUS マークを要することになった結果, *rə-* が接頭されたと考えざるを得ない。

従ってこの方言では, 「誰かをして何かを乾かしめる」のであれば, *ka-sə-rə-k-ram* というように, VI 語幹 *ram* に3つもの CAUS マーカーが接頭するわけである。

1.2.14 *wa-*

この接辞の主たる機能は, 形容詞と名詞を動詞化することである。例えば:

- (11) *nyi-gyo* *ti-gi* *ke-wa-stsheny* *mo* *ngos*.
 {*ke-wa-stshe-ny*}
 2PL *water* *TSF-CAUS-hot-2PL* *IRG* *AUX: S*

湯を沸かすんですか?

長野 嘉戎語の動作の様態を示す接辞

- (12) nga ta-wa-nbi-yang ko.
{ta-wa-Nbi-yas-ng}
1SG up-CAUS-limp(N)-1SG AUX: S

私は跛をひいた。

- (13) wa-rgyap gya-rong na-che na-wa-rmow.
his-wife rGyarong went {na-wa-rmo-w} PFT-CAUS-dream-3SG

彼は彼の奥さんが嘉戎へ行った夢を見た。

- (14) nga bi-syer wa-pu no-wa-rdong ko.
{no-wa-rdo-ng}
1SG yesterday his-child PFT-CAUS-look-1SG AUX: S

私は昨日彼の子に会った。

(11)は *stshe* 「熱い」を *wa-* が動詞化し、(12)では、*nbi-yas* 「跛」という名詞を *wa-* が「跛をひく」に転換する。(13)の「夢を見る」には2つの表現がある。ひとつは *rmo ka-pa* であり、直訳すれば「夢を為す」の意、もうひとつは(13)にある *ka-wa-rmo* である。*rmo* は基本的に名詞であり、之を動詞化するのに *wa-* が用いられる。

(14)の *rdo* は「見る」の意の動詞で、*mto* 「見える」の VT 形式と考えられる。この *rdo* に *wa-* が接頭されて、「見せしむる、会う」に意味が特殊化される。

1.2.2 相互動作を示すには *ngə-* が P4 の位置に置かれる。

- (15) wu-yo-jis kew-top ko.
{ke-wu-top}
3DL TSF-3DL-hit AUX: S

彼ら2人は(誰かを)殴るだろう。

- (16) wu-yo-jis kew-ngə-top ko.
{ke-wu-ngə-top}
3DL TSF-3DL-mutual act-hit AUX: S

彼ら2人は殴り合うだろう。

(15)は *agt.* である彼ら2人が協力して第三者を殴るのに対し、(16)は *agt.* が同時に *ptt.* でもある場合である。

次の3例は、そこに現れる動詞語幹がもともと「互に」の意を含んでおり、何れの場合も *ngə-* は義務的でない。

- (17) *chi-gyo ka-te kə-ngə-wa-rdoch mo ngo.*
 {*kə-ngə-wa-rdo-ch*}
 1DL where 1DL-mutual act-meet-1DL IRG AUX: S
 我々はどこで会いましょうか?
- (18) *te-rmi ku-mkhya ke-kə-nge-dzuny no-ngos.*
 {*ke-kə-ngə-yi-dzu-ny*}
 man many TSF-3PL-mutual act-gather-3PL AUX: EX
 たくさんの人が集まるだろう。
- (19) *tə-gi ta-ngə-kyo-lo ko.*
 {*te-ngə-kyo-lo*}
 water up-mutual act-mix AUX: S
 水がまざっている。

「吐く」の語幹は *mphat* であるが、これには通常意志で制御できぬ動作を示す接辞 *mə-* が接頭して、*mə-mphat* が unitary root と見做されるが、その *mə-* の代りに *ngə-* を用いることができる。次の2文は何れも「私は吐く」と訳されるが、どのような「吐く」行為かが少し異なる。

- (20) *nga ke-mə-mphang ko.*
 {*ke-mə-mphat-ng*}
 1SG TSF-automatic act-vomit-1SG AUX: S
- (21) *nga ke-ngə-mphang ko.*
 {*ke-ngə-mphat-ng*}
 1SG TSF-mutual act-vomit-1SG AUX: S

(20)が中立の叙述で、(21)のように *ngə-* が現れると、胃の中にあるものが食道内でぶつかり合いながら逆蠕動で上ってくる動作状況に話し手の注意が向いていることになる。

1.2.3 反覆動作を示す接辞は *ra-* と *na-* である。金鷗 *et al.* の記述 [1957, 1958] では、これらの接辞がつく語幹は常に reduplicate されるが、筆者の資料にはそのような例はない。

- (22) nga nə-ra-krong ko.
 {nə-ra-kro-ng}
 1SG PFT-repetitive act-scratch-1SG AUX: S
 私はボリボリ搔いた。

- (23) wu-yo ke-ra-chek ko.
 {ke-ra-chak-w}
 3SG TSF-repetitive act-tread-3SG AUX: S
 彼はドンドン踏みつけるだろう。

- (24) sytə wa-key ko-ho-ke mə-ma ra-skyony.
 {ra-skyo-ny}
 this than nice-ADV POLITE DEMAND repetitive act-write-2PL
 これよりもっときれいに書いて下さいませんか?

「搔く」「踏む」は元来反覆動作を予想させるものであるから、ra-が共起するのがむしろ普通である。「書く」も、竹ペンを動かす動作が反覆的と映るとみえ、skyoをルートとする場合はra-が現れるが、「書く」といえば「手紙を書く」ことを意味することが多いので、ta-skyos ka-pa「手紙を作る／書く」という表現の方がよく用いられる。

もうひとつの接辞 na- については次の2文が典型的である。

- (25) sytə wu-rmi-yo ke-kə-na-riny ko.
 {ke-kə-na-ri-ny}
 this man-PL TSF-3PL-repetitive act-laugh-3PL AUX: S
 この男どもは笑うだろう。

- (26) nga sytə wu-rmi-yo ke-sə-na-ring ko.
 {ke-sə-na-ri-ng} AUX: S
 1SG this man-PL TSF-CAUS-repetitive act-laugh-1SG
 私はこの男どもを笑わせるだろう。

na-の接辞する例はこの動詞の他3例あるにすぎないが、何れの場合も na-ROOT が unitary root と見做し得るものである。(26)もその例で、P4にCAUSのsə-が立ち得るのであるから、na-riはこれひとまとまりでルートを考えざるを得ない。

1.2.4 意志によって制御できない自動的動作を示すマーカーとして mə- がある。

例文(20)(21)に少し触れた *mphat* (「吐く」) は *mə-* を要する典型的な例である。

- (27) *nga to-mə-mphang ko.*
 {*to-mə-mphat-ng*}
 1SG up-automatic act-vomit-1SG AUX: S
 私は吐いた。

完了態であるので、P2 接辞 (この場合 *to-*「上へ」) が立つ。この VP は従って、吐く行為が自動的動作であることと、その行為の趣く方向が上方であることの2つを接辞が指定しているわけである。

mə- の意味を更に明確にするため、*mə-* が同じ「吐く」という語幹に接頭される場合とされない場合を、その命令法について観察してみよう。(28)(29)は何れも「吐け！」の意である。

- (28) *to-mə-mphat!*
 (29) *to-mphat!*

(28)には *mə-* が接頭されていて、こちらがニュートラルな意味——つまり、*agt.* は吐きたいと思っているのであり、それに対して話し手は、その自然の生理現象に逆らうなどと言っているのである。これに対し、(29)には *mə-* が無い。この場合は、*agt.* は別に吐き気を催しているのではないが、話し手は例えば *agt.* が悪い物を食べたことを知っており、無理してでも吐け、と勧めているのである。

「ピクピク動く」も *mə-* を要求する。*ka-mə-lmo* がそれで、*lmo* は単独で用いられることが殆どない。ピクピクの部分は反覆動作なので、*mə-* の代りに *ra-* が現れても不思議はないが、筆者の資料にその例はない。これはおそらく、*lmo* という語幹の意味自体が、身体の一部が抑え難く動くということに特定されているからと思われる。

1.2.11. に解説した **ka-sə-na* (「よくする」「直す」) に対し、*ka-mə-na* は「自然によくなる、治癒する」を表わす。*sə-* が純然たる CAUS マーカーであるのに対し、*mə-* が形容詞に接頭して「自然に、自動的に」の意を含む自動詞に変換される好例である。

感覚を表わす動詞の中にも、*mə-* が unitary root の一部に現れるものがある。例えば、*mə-rtšap* (「痛い(と感ずる)」) がそれである。

- (30) *nga nga-Nməs nə-mə-rtšap ko.*
 {*nə-mə-rtšap*}
 1SG my-wound PRO-uncontrollable act-painful AUX: S
 私は(この)傷が痛い。[PRO については 1.2.6. に詳述]

「着く」は *kə-ndu* であるが, *mə-* を伴うことがある。次の2文を比べてみよう。

(31) *nga so-sni ke-ndu-ng ko.*

(32) *nga so-sni ke-mə-ndu-ng ko.*

共に「私は明日到着するだろう」の意であるが, (31)はごく中立の陳述であり, 着くのは *agt.* の意志による。(32)はそれに対し, *agt.* の意志に拘わらず, 明日到着することになるとのニュアンスを持っており, 状況としてはおそらく, *agt.* は誰かに連れられているか, このままのペースでゆくと当然明日着くといった客観的見通しを叙述しているか, の何れかである。

1.2.5 接辞 *sa-* は, 話し手にとっての近称の主観的行為を特に客体化する。近称とは, 話し手がその *agt.* が *speech circle* の内部に存在すると認める場合で, 普通は1人称と2人称である。ここに関連する動詞は極めて主観的なもの, 例えば「愛する」「嫌う」「夢をみる」等で, この結果, *sa-* を含むVPは一見奇妙な接辞の組み合わせになる。

(33) *nya-rmo ke-no-sa-pany.*
 {*ke-no-sa-ɸa-ny*}
your-dream TSF-PFT-objectivizer-make-2PL
 夢をみなさい。

(34) *nga wu-mi ke-no-sa-nə-ngang ko.*
 {*ke-no-sa-nə-nga-ng*}
1SG his-daughter TSF-PFT-objectivizer-like-1SG AUX: S
 私は彼の娘を愛していたのだ。

上の2文に対し, *sa-* を欠いた文も全く文法的である。ただ, *sa-* のある文は, 話し手が *agt.* の行為を突き放して客観的に, 或いは, 第2の自我の立場から叙述しようとする心理的態度に裏づけられている。

1.2.6 進行形は P4 の位置に *nə-* を置くことによって示される。この形態は1.1.に解説した完了態マーカーと同じである。意味論的には, 進行形は普通未完了態の枠組の中に位置づけられるのだが, この言語ではその形式が完了態マーカーと一致するのは興味深い。

P2 の位置に現れる完了態マーカーと P4 に置かれる進行形マーカーが同一形式で

あることによる cohesion 又は ambiguity の問題は、出現する VP 中での位置の故に、殆ど起こらない。ただし、P3 がゼロの場合は、*nə-* が完了を示すのか進行形を示すのか VP の形式だけでは区別できない。例えば、下に掲げる(39)が「傷がはれ上がった」を意味するのか、「傷がはれ上がりつつある」のかは、(現実には別の方法によって区別できるのだが) VP_{final} 内での区別は論理上できない。

次の4文は一応の区別のたつ例である。

- (35) wu-gyo-nye nga-mnyok wu-dza ko.
 3PL my-grain 3PL-eat AUX: S
 {wu-dza}

彼らは私の穀物を食べようとしている。

- (36) wu-gyo-nye nga-mnyok wu-nə-dza ko.
 3PL my-grain 3PL-PRO-eat AUX: S
 {wu-nə-dza}

彼らは私の穀物を食べている。

- (37) wu-gyo-nye nga-mnyok tu-dza ko.
 3PL my-grain PFT-3PL-eat AUX: S
 {to-wu-dza}

彼らは私の穀物を食べた。

- (38) yi-nyo nyi-gyo nə-mnyok no-nə-dzey ko.
 1PL (exc.) 2PL your-grain PFT-PRO-eat-1PL AUX: S
 {no-nə-dza-y}

我々はあなた方の穀物を食べていた。

状態を示す動詞語幹に *nə-* が接頭した場合は常にその状態が既に実現していることを示す。従ってその *nə-* は PFT とも PRO とも解釈され得る。

- (39) bi-syer ka-pri kə-ka-dza wa-sta sik-pa nə-Nbop.
 yesterday snake VPnf-PFT-eat wound very PRO-swell
 {nə-Nbop}

蛇が昨日咬んだ傷がひどくはれ上がっている。

下に記す2つの例文セットは *nə-* が ambiguous でない状態動詞の例である。

- (40) nga ngə-skru ke-ra?-gya.
 1SG my-body TSF-feel itchy
 {ke-ra?-gya}

私は体がかゆくなるだろう。

長野 嘉我語の動作の様態を示す接辞

(40a) nga ngə-skru raʔ-gya.
 {raʔ-gya}
1SG my-body feel itchy
私は体がかゆくなりそうだ。

(40b) nga ngə-skru nə-raʔ-gya.
 {nə-raʔ-gya}
1SG my-body PRO-feel itchy
私は体がかゆい。

(40c) nga ngə-skru nə-nə-raʔ-gya.
 {nə-nə-raʔ-gya}
1SG my-body PFT-PRO-feel itchy
私は体がかゆくなっていた。

(41) nga ngə-nməs ke-mə-rtsap ko.
 {ke-mə-rtsap}
1SG my-wound TSF-feel painful AUX: S
私は傷が痛むだろう。

(41a) nga ngə-nməs nə-mə-rtsap ko.
 {nə-mə-rtsap}
1SG my-wound PRO-feel painful AUX: S
私は傷が痛い。

(41b) nga ngə-nməs to-mə-rtsap ko.
 {to-mə-rtsap}
1SG my-wound PFT-feel painful AUX: S
私は傷が痛かった。

(41c) nga ngə-nməs to-nə-mə-rtsap ko.
 {to-nə-mə-rtsap}
1SG my-wound PFT-PRO-feel painful AUX: S
私は傷に痛みを感じていた。

何れのグループにあっても、ke-nə(PFT)-nə(PRO)-ROOT という組み合わせはない。

1.2.7 再帰形も亦, $nə-$ によって表わされる。例えば, $ka-top$ (「打つ」) に対し, $ka-nə-top$ は「己れを打つ」の意になる。筆者の資料にはこの1例しかない。

この意味の $nə-$ の派生的用法として, $nə-$ が自動詞性を強める例がある。金鵬 *et al.* [1958: 81] には, $kə-Ngri$ (「崩壊する」) に $nə-$ を接頭した $kə-nə-Ngri$ が挙げられているが, 「自己崩壊する, 内部から崩れる」の意だそうである。筆者のデータにも之に類する例はあるにはあるが, 他動詞である。 $ka-nə-nga$ (「好き」) がそれで, 普通 unitary root として現れるが, この $nə-$ は金鵬 *et al.* の例に平行である。 $nə-$ を接頭しない $ka-nga$ との差を誇張して訳すならば, 「心の底から/抗し難く, 好き」ということになる。

1.2.8 上に記述した生産的な P4 接辞の他に, より古い時期に既に語彙化して, ルートの一部と考えられる接辞が幾つかある。読者諸賢はお気づきと思うが, 今迄の記述の中にも, “P4 接辞+語幹” が unitary root となり, これの前にもうひとつ P4 接辞をとり得るものがあつた。これらは現在進行中の語彙化現象と言える。これに対し, 既に完了した語彙化現象をここに指摘しておきたい。

嘉戎語卓克基方言の動詞語幹は一般に (C)C_i(G)V(C_f) という音節構造を有する。括弧内の要素は義務的でなく, C_f は末子音, G はグラインドで, $-y-$, $-w-$, $-r-$, $-l-$ の何れかである。この内, 初頭子音 C_i の前の子音は, 共時的記述のレベルではルートの一部と認めざるを得ないけれども, 通時的に見ると元来 productive な接辞であつたものが語彙化した結果と考えられる。全ての (C) がそれに該当する訳ではないが, 語構成の面からみて妥当性のあるものが CAUS マーカーに幾つかある。

先ず VI/VT コントラストを表わす接辞について, 次の例を対照されたい。

$n-gyur$ 「変わる」 : $s-gyur$ 「変える」
 $n-kor$ 「廻る」 : $s-kor$ 「廻す」
 $n-kru$ 「巻きつく」: $s-kru$ 「巻く」

$s-$ が VT を, $n-$ が VI を各々示す接頭辞であつたことは確実である。この $s-$ は生産的 P4 接辞 $sə-$ と同源であり, PTB * $s-$ の reflex と考えられる。VI を指定する $n-$ はおそらく P4 接辞 $nə-$ (cf. 1.2.7.), 又は WT ' 比定される。

VI 形式が $n-$ でなく, $\emptyset-$ で VT $s-$ に対立する例もある。例えば:

$\emptyset-rong$ 「見える」: $s-rong$ 「見せる」
 $\emptyset-ki$ 「借りる」: $s-ki$ 「貸す」

s- 又は sy- を接頭するものとして他に, s-khip 「吸う」, s-kye 「生まれる」, sy-pak 「喉が渇く」, sy-dar 「恐れる」 などがあるが, この接頭辞は身体又は感情を表わす *s- と同源である。

接辞 r- に関しても, 数は少ないが, 同様の対立が観察される。

m-to 「見る」: r-to 「会う」

∅-was 「昇る」: r-was 「起きる」

この2例では, r- の接頭する方がより意志的なものが働いているので, 単純な CAUS 構成というよりはむしろ Benedict [1972: 109-110] の言う “intensive” に当たるのかも知れない。

この2つの CAUS マーカーの他に, p- と k- が WT b- 及び g- に比接される使役構成を持つが, 嘉戎語の VP 内での P4 接辞にはそれと比較すべきものは存在しないので, ここでは論じない。

2. 比較

前章に記述した P4 接辞が TB 諸語の中でどのような位置を占めるのか, 又, 嘉戎語卓克基方言の様態を示す接辞が PTB 形式の再構成や下位分類にどのような役割を果たし得るのかを, 本章で検討する。

比較に当っては, 生産的な接辞, unitary root の一部として出現する接辞, 及び, 語彙化した接辞全てを考慮の対象とする。又, 比較の counterpart とする言語は, 略号表 (0.3) に挙げる13のことばに限定する。これらの言語表記の orthographic standardization は Hyman [1975] により, 声調表記は次の方式による:

| | | | |
|---|-----|---|------------|
| — | 低平型 | = | 高平型 |
| / | 平昇型 | \ | 中降型 |
| \ | 高降型 | ∧ | 低昇降型 (213) |

2.1 CAUS マーカーとして嘉戎語は4つの接辞, sə-, syə-, rə-, wa- を有する。

この間, sə- は TB 諸語全般に亘って広く観察され, PTB でも *s- として再構されるものに^{らいげん}来源を求めることができる。これについては既に多くの論考があるので,

ここで新たに論ずる必要はないと思われる¹⁴⁾。

2.1.1 嘉戎語は *sə-* からの派生と考えられる *syə-* を持っている。*syə-* は「…するのを助ける、助けて…させる」という特定の意味を有し、*sə-* とは相補的であることから、*sə-* からの派生接辞と考えてよい。

この種の機能分化はラワン語 (RW=NU ヌン語) にも見られる。RW は *da-* と *sha-* の2種の CAUS マーカーを持っており、Barnard [1934: 114] によればその2つは機能的に全く均質である。ところが、Barnard の挙げている例文を調べると、*sha-* が現れる文の方が、*bnf.* を予測させる、或いは現実に存在する割合が著しく高い。

RW 以外で GC *syə-* と cognate と思われる音形式を有するのはカチン語 (JG) と羌語 (CH) で、JG *jə-* [中国科学院少数民族語言研究所(主編) 1959: 30] と CH [TP] *-zyi* [孫 1981a: 111] の形を持っているが、2言語ともにこの形が純然たる CAUS マークで、嘉戎語のような特殊化された意味を表わす訳ではない。

2.1.2 接辞 *rə-* が生産的な CAUS マークであり、同時に語彙化された接頭辞 *r-* と同源であることは前章に例を挙げておいた。この *r-* は WT に保存されている *r-* に同定される古い層を代表するもので、PTB **r-* の直接の reflex (祖形の、現代語又は文献における反映形式) である。

PTB の **r-* の reflex が有機的な形態手続として生きているのはボド・ナガ語群で、例えばディマーサ (Dimasa) 語では、接中辞 *-rî-* が生産的な CAUS 構成法である [WOLFENDEN 1929: 116]。語幹だけの例を挙げると、「食べる」は *jî* であるが、*jirî* は「飼う、餌をやる」の様に CAUS に転換される。

2.1.3 嘉戎語における4番目の CAUS マークは *wa-* で、この接辞は主として名詞の形容(動)詞を動詞化する。この機能と音形式双方を持つ他の言語は管見の及ぶ限りでは存在しないが、ディマーサ語は之と cognate と思われる形式を有する。接頭辞 *pá-* がそれで、*raing* 「乾燥した」に対し、*pá-raing* は「乾かす」を意味する

14) 直接嘉戎語の使役構成には関係がないが、TB 全般を見ると、**s-* 系の CAUS のほかに、*dental* を初頭音とする CAUS マーカーがある。例えば、TR では *su* と *tu* [孫 1982: 101-102]、RW では *da* [BARNARD 1934: 14]、ロタ・ナガ語では *tók* が CAUS をマークする。WT も TR と同じ体系を持ち、*s-* (*~r-* *~l-*) と *{g-* *~d-*} がそのマーカーである。

[WOLFENDEN 1929: 117]。GC で kram が「乾いた」、wa-kram が「乾かす」であるのとパラレルである。

GC における「乾いた」を示す語彙 kram と pram については記述部分で解説したが、pram の p- はこのセクションで問題にしている wa- と同源であると考えられる。GC 内部だけでは論証できないけれども、上のディマーサ語との比較によって、そのことは可能になる。更に、嘉戎語雑谷方言（第3のインフォーマント、タゴ師の御教示による）において k-ram が VI, p-ram が VT であることも考慮に入れると、嘉戎祖語段階では、*ram が形容詞、*k-ram がその動詞化された形式、*p-ram が VT という語構成を持っていたと演繹することができる。

ディマーサ語の他に、トゥルン語 (TR) も同様の手続を保っている。TR mə-nəm が「(ひどい) 臭いがする」のに対し、pə-nam は「臭いをかぐ」の意である [BENEDICT 1972: 117]。GC には平行する用例がないが、GH (嘉戎語カムト方言) の mi-nom が TR mə-nam に対応する。GH mi-nom の CAUS 形式は記録されていない。

ミキル (Mikir) 語 pe~pî-, アンガミ・ナガ (Angami Naga) 語 pə- (J. A. マティソフ教授の御教示による)、エンペオ (Empeo) 語 pe- 等は何れも上掲例と来源を同じくすると考えてよからう。

TR における mə- vs. pə- の対立は、GC では語彙化された接辞 (inner prefix) のそれとして保たれている。例えば、GC m-zyit 「落ちる」: p-syit 「落とす」。

2.2 意志で制御できない自動的動作は mə- によって指定される。「吐く」「ピクピク動く」「痛い (と感ずる)」等は通常 unitary root の一部として mə- を要求する。

平行する語彙のセットは揃わないが、次の諸例はその接辞の意味を明確に示している。

| | GC | JG | AO | WT |
|-----|----------|--------|--------|-------|
| 臭う | nə-mnam | ma-nam | me-nem | mnam |
| 育つ | | ma-dem | | |
| 笑う | | ma-ni | me-na | |
| 軟かい | mə-no | ma-ni | | mnyen |
| 吐く | mə-mphat | | | |
| 動く | mə-lmo | | | |
| 痛い | mə-rtsap | | | |

これらの接辞 (GC を除く) について Wolfenden は,

“the Kachin verb forms in ma- which normally constitute a class of intransitives descriptive of unchanging conditions...naturally show the same tendency as the m-verbs of Tibetan” [WOLFENDEN 1929: 76].

と述べている。上の例は概ね Wolfenden の見解を支持するが、一方 Benedict は PTB *m- の意味を ‘intransitive, durative, reflexive’ [BENEDICT 1972: 117] としており、GC の例に限って言えば、Benedict 説の方がよくあてはまる。

2.3 相互動作を示す GC ngə- に対しては、金鵬 *et al.* の記述する梭磨方言 (GM) に nga-+語幹+語幹の形式がある。これ以外に直接の同源語は今の処ない。トゥルン語に ə[孫 1982: 103] が反覆動作を表わす接辞として存在し、これが最も我々の ngə- に近そうだが、推論の域を出ない。

2.4 反覆動作を示す接辞には ra- と na- がある。ra- の来源については、方向接辞としての PTB *r-, CAUS 標識の rə-, 全く別系統の動词语群の3つの可能性が考えられるけれども、種々の例文を検討しても蓋然性の高い cognate を同定することができない。

na- もその来源がはっきりしない。GC では、na- は反覆動作のみを指定するが、GM では①反覆動作、②…ふりをする、③かつて…だった、の3つの意味が表わされる [金鵬 *et al.* 1958: 82]。3つの異なる系統の形態素が偶々 merge したのか、1つの形態が意味分化したのかがそもそも分からないが、仮に③が最も古い意味だとすれば、完了態マーカ-との関係が生じてくる。

タルアン (Taruang) 語は唯一つ cognate を提供してくれる。タルアン語 -da’ は接尾辞ではあるが、ルートに付いて反覆動作を示す [孫 *et al.* 1980: 207]。トゥルン語でも、この dental/voiced の子音は GC n-と対応しており [cf. NAGANO 1983: 233-242], タルアン語形式が GC 形式と同源であることはほぼ確実である。

2.5 動作者の行為を客体化する接辞 sa- は Wolfenden の言う通り、directive からの派生と考えてよい。WT s- と同源であり、PTB *s- の reflex である (この *s- は CAUS マーカ-ではなく、directive としての *s-)。Wolfenden はこれについて

次のように説明する。

“In [WT] verbs of class (b) -s- may be regarded as definitely directive towards an indirect object which is external....Verbs descriptive of sentiment or feeling towards external objects or conditions naturally occur here” [WOLFENDEN 1929: 46].

筆者のデータ(1.2.5 に挙げたもの)と金鷗 *et al.* の例は全て感情を表わす動詞で、Wolfenden が示す例と語幹形式は別であるが、前置辞の役割はよく一致している。

2.6 進行態と再帰形は $nə-$ によってマークされる。この $nə-$ は完了態を示す接辞 $nə-$ 、及び、方向(「下」)を表わす3種の接辞 $no-/na-/ni-$ と同源である [cf. NAGANO 1983: 55, 250]。おそらく嘉戎祖語段階での $*nV-$ は “macro-DOWN” を表わし、これがアスペクト接辞と方向接辞に分化したと考えられる。PRO は一種のアスペクトであるから、その段階で $nə-$ をそのマーカとして採用したと仮設して大過ないであろう。

では、この $nə-$ の本来の意味と来源は何か? 勿論、アスペクトは基本的な文法単位であるから、それを示す接辞は本来的であって、これ以上遡ることは不可能との見解もあり得る。しかし乍ら、筆者は以下の比較から、 $nə-$ は2人称を表わす要素と密接な関係があることを指摘しておきたい。

ダフラ語 (DF) は次の様な PFT マーキング体系を持っている。Hamilton [1900: 26-27, 33] を筆者なりにまとめて示そう。

- ① 一般的に PFT は、ROOT+t+numma 又は ROOT+n+bâ の形で表わされる。
- ② 1人称の場合は ROOT+t+numma の形式のみ。例えば、kât-t-numma。「私は見た」。
- ③ 2人称については、接尾要素が -n-na でなければならない。但し、疑問文に現れる確率が高い。

DF の -na は、その音形式と機能から嘉戎語の $nə-$ と同源であり、又、拙稿 [NAGANO 1983: 253-273] に詳述した通り、この2言語の人称接辞の体系を考慮に入れると、この PFT マーカは本来2人称を表わす接辞と来源が同じと仮設することができる。又、①の -bâ は PTB 段階で3人称を示す $*m-$ の reflex ではないかと思われる。

上記の仮説は次のモンパ語 (Monpa) の事例で更に支持される。この言語も -na を PFT マーカとして持っている。例えば:

jang shilong-gei u-na.
I Shillong-from come-PFT

私はシロンから来た。

[DAS GUPTA 1968: 40]

Das Gupta はこの -na を解説して、「習慣と状態」をも示すと言うが [DAS GUPTA 1968: 40], この事実は GC nə- が完了態と同時に進行態を表わすのと平行する。さて、モンパ語の -na は2人称代名詞に一致する。同語の人称代名詞は次の通りである。

1SG jang
1PL ashi
2SG nan
2PL nashi
3SG dan
3PL dashi [DAS GUPTA 1968: 26]

この資料から見る限り、-n は単数、-shi が様数のマークで、na- は2人称を示す核になっている。この分節が正しければ、このモンパ語の例は筆者の演繹を強く支持する材料になるだろう。

今迄述べてきた、PFT マーカー（及び PRO マーカー）と2人称を示す pronominal な要素との歴史的な関係に対し、PFT マーカーは動詞語幹に来源を求め得るとする考え方もある。例えば、PTB *na は「来て休む、(鳥が木に)止まる、棲む」の意で、WT gnas, ビルマ文語 nâ, ラフ語 nâ などはその reflex であるが、進行のAspectを説明するには確かに有力な根拠であろう。但し、完了のAspectには意味的に結び付けにくいと筆者は考えている。

3. む す び

以上の記述と比較により、嘉戎語卓克基方言の VP_{final} の P4 の位置に立つ接辞の体系が明確にされ、その意味と来源についても或る程度の見通しがついたと思う。

記述分析のレベルにおいては、小稿の述べる通り、P4 接辞は、これはこれでひとまとまりと考えざるを得ないけれども、各々の形態の歴史という観点からすると、P4 接辞の体系を構成する要素として同列に論じるには若干難のあるものが少なくない。つまり、P4 接辞は「様態を示す接辞」と仮にくくったが、それらは、拙稿 [長野 1984] で論じた方向接辞 (P2) のような或る意味的均質性を有する訳ではないのである。

特に使役や進行を示すものは極めて文法的であり、語幹に最も近い接頭辞であることもあって、語彙化と非語彙化を何回か経てきたと思われる。したがって、これらの歴史を辿るには、もっと豊富な textual data を集積し、内的再構を試みる必要がある。

それ以外の接辞は、その意味が特殊化されていることで記述はすっきりするが、比較すべき他言語の例が豊富とは言えない。より多くの言語を渉猟して、的確な位置づけをすることが今後の課題として残っている。

文 献

雑誌略号は Shafer 1957: *Bibliography of Sino-Tibetan Languages*, Wiesbaden による。これ以後のものは下記の5件を除き、略記していない。

| | |
|----------|---|
| LTBA | Linguistics of the Tibeto-Burman Area |
| NBP | Nagaland Bhasha Parishad |
| OPWSTBL | Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics |
| S-T Conf | International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics |
| TUFS | Tokyo University of Foreign Studies |

ALLEN, N. J.

1975 *Sketch of Thulung Grammar*. Ithaca: Cornell University.

BAILEY, T. G.

1909 A brief grammar of the Kanauri language. *ZDMG* 63: 661-687.

1920 *Linguistic Studies from the Himalayas*. London. (reprinted by Asian Publication Services, New Delhi, 1975.)

BARNARD, J. T. O.

1934 *A Handbook of the Rawang Dialect of the Nung Language*. Rangoon.

BAUMAN, J.

1975 *Pronouns and Pronominal Morphology in Tibeto-Burman*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.

1976 An issue in the subgrouping of the Tibeto-Burman languages: Lepcha and Mikir. Circulated at the 9th S-T Conf., Copenhagen.

1979 A historical perspective on ergativity in Tibeto-Burman. In Plank (ed.), *Ergativity*, New York: Academic Press, pp. 419-434.

BENEDICT, P. K.

1972 *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Cambridge: University Press.

1979 Four forays into Karen linguistic history. *LTBA* 5(1): 1-36.

BHAT, D. N. Sh.

1968 *Boro Vocabulary*. Poona.

1969 *Tankhur Naga Vocabulary*. Poona.

BOR, N. L.

1938 Yano Dafia Grammar and Vocabulary. *JASB Letters* 4: 217-281.

BRADLEY, D.

1971 Prefixes and Suffixes in Burmese-Lolo. Circulated at the 4th S-T Conf., Bloomington.

1979 *Lahu Dialects*. Canberra: ANU.

BRIGHT, W.

1973a *Lushai Verbs*. ms.

1973b *English-Lushai Word List*. ms.

- BURLING, R.
 1959 Proto-Bodo. *Language* 35: 433-453.
 1961 *A Garo Grammar*. Poona.
 1967 Proto Lolo-Burmese. *IJAL* 33(2): part 2.
- CAUGHLEY, R. & K. CAUGHLEY
 1970 Chepang texts. *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal* Pt. 4, Texts 2: 1-130, *OPWSTBL* 3, Urbana.
- チェイフ, W. L.
 1974 『意味と言語構造』東京:大修館書店。
- CHANG, B. S.
 1971 The Tibetan causative: phonology. *BIHP* 42(4): 623-765.
- CHANG, Kun
 1967 A comparative study of the Southern Ch'iang dialects. *Monumenta Serica* 26: 422-444.
 1968 The phonology of a Gyarong dialect. *BIHP* 38: 261-275.
 1972 Sino-Tibetan 'iron': *qhleks. *JAOS* 92: 230-245.
- CHANG, Kun & B. S. CHANG
 1975 Gyarong historical phonology. *BIHP* 46 (3): 391-524.
- CLARK, E. W.
 1893 *Ao Naga Grammar*. Shillong.
- COMRIE, B.
 1973 The ergative: variations on a theme. *Lingua* 32: 239-253.
- CONRADY, A.
 1896 *Eine indochinesische Causativ-Demonstrativ-Bildung*. Wiesbaden.
- DAS GUPTA, K.
 1963 *An Introduction to the Gallong Language*. Shillong: NEFA Agency.
 1968 *An Introduction to Central Monpa*. Shillong: NEFA Agency.
 1971 *An Introduction to the Nocte Languages*. Shillong: NEFA Agency.
 1979 *A Phrase Book in Singpho*. Shillong: Govt. of Arunachal Pradesh.
- DELANCEY, S.
 1980 *Deictic Categories in the Tibeto-Burman Verb*. Ph.D. dissertation, Indiana University.
 1981 An interpretation of split ergativity and related patterns. *Lg* 57(3): 626-657.
 1982 *Lhasa Tibetan: a case study in ergative typology*. ms.
- DUNDAS, W. C. M.
 1908 *An Outline Grammar and Dictionary of the Kachari (Dimasa) Language*. Shillong.
Dzongkha
 1977 *Introduction to Dzongkha*. Thimpu & Delhi.
- EDGAR, J. H.
 1932 The Giarung language. *Journal of West China Border Research Society* 5 (suppl.).
- EGEROD, S.
 1971 Some Akha basic features. Circulated at S-T Conf., Indiana University.
 1973 Further notes on Akha. Circulated at S-T Conf., University of California, San Diego.
- FRANCKE, A. H.
 1909 Tabellen der Pronomina und Verba in den drei Sprachen Lahoul's: Bunan, Manchad und Tinan. *ZDMG* 63: 65-97.
- GIVÓN, T.
 1983 Ergative morphology and transitivity gradients in Newari. Circulated at the 16th S-T Conf., University of Washington, Seattle.
- GLOVER, W. W.
 1974 *Sememic and Grammatical Structures in Gurung*. Kathmandu: S.I.L.

- GREENBERG, J.
1966 Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. *Universals of Language* 73-113, Cambridge: M.I.T. Press.
- GRIERSON, G. (ed.)
1909 *Linguistic Survey of India*. Calcutta.
- GRÜSSNER, K.-H.
1978 *Arleng Alam: die Sprache der Mikir*. Wiesbaden.
1982 *Mikir Dictionary*. ms.
- HAAS, M.
1969 *Prehistory of Languages*. The Hague.
- HALE, A.
1982 *Research on Tibeto-Burman Languages*. Berlin.
- HAMILTON, R. C.
1900 *An Outline Grammar of the Dafla Language*. Shillong.
- HANSON, O.
1896 *A Grammar of the Kachin Language*. Rangoon.
- HASHIMOTO, M.
1977 *The Newari Language*. Monumenta Serindica 2. TUFS.
- HENDERSON, E. J. A.
1957 Colloquial Chin as a pronominalized language. *BOAS* 20: 323-327.
1963 Notes on Teizang, a northern Chin dialect. *BSOAS* 26: 551-558.
1965 *Tiddim Chin*. London: SOAS.
- HERTZ, H. F.
1935 *A Practical Handbook of the Kachin or Chingpaw Language*. Rangoon: Supdt., Govt. Printing and Stationary.
- HODGSON, B. H.
1849 On the aborigines of the eastern frontier. *JASB* 18: 238-246.
1850 On the aborigines of the north-east frontier. *JASB* 19: 309-316.
1853 On the Indo-Chinese borderers and their connexion with the Himalayans and Tibetans. *JASB* 22: 1-25.
1857-8 Comparative vocabulary of the languages of the broken tribes of Nepal. *JASB* 26: 317-522, 27: 393-442.
1874 *Essays on the Languages, Literature and Religion of Nepal and Tibet*. London. (reprinted by Mañjuśri Publishing House, New Delhi, 1972.)
- HOPE, E. R.
1973 Constraints on Lisu noun phrase order. *FL* 10: 79-109.
- HOUGHTON, B.
1892 *Essay on the Languages of the Southern Chins*. Rangoon.
- HYMAN, L. M.
1975 *Phonology*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- JÄSCHKE, H. A.
1954 *Tibetan Grammar*. New York: Frederick Ungar.
1968 *Tibetan-English Dictionary*. London: Routledge & Kegan Paul.
- JORDAN, M.
1971 *Chin Dictionary and Grammar*. ms.
- 金鵬
1949 Etude sur le Jyarong. 『漢学』 3: 211-300.
- 金鵬 et al.
1957, 58 「嘉戎語梭磨話の語言和形態」 『語言研究』 2: 123-151, 3: 71-108.
- KÖLVER, U.
1976 *Satztypen und Verbsubkategorisierung der Newari*. Structura Band 10, München.

- Konyak*
 n.d. *Hindi Konyak English Dictionary*. Kohima: NBP.
- LEHMAN, F. K.
 1977 Etymological speculations on some Chin words. Circulated at the 10th S-T Conf., Washington.
- LI, Fangkuei (李 方桂)
 1933 Certain phonetic influences of the Tibetan prefixes upon the root initials. *BIHP* 4: 135-157.
 1961 A Sino-Tibetan glossary from Tun-huang. *TP* 49(4/5): 233-356.
- 林 向荣
 1982 「嘉戎語構詞法研究」S-T Conf., 北京. (『民族語文』3: 47-58 に再録)
- LO, Ch'angp'ei (羅 常培)
 1945 A preliminary study on the Trung language of Kung Shan. *HJAS* 8: 343-348.
- LORRAIN, J. H.
 1907 *Dictionary of the Abor-Miri Language*. Shillong.
 1940 *Dictionary of the Lushai Language*. Calcutta: Royal Asiatic Society of Bengal.
- LORRAIN, J. H. & F. SAVIDGE
 1898 *A Grammar and Dictionary of the Lushai Language*. Shillong.
- LORRAIN, R. A.
 1951 *Grammar and Dictionary of the Lakher or Mara Language*. Shillong.
- Lushai*
 1956 *English-Lushai Dictionary*. Aijal.
- MALLA, K. P.
 1981 *Contemporary Newari*. ms.
- MARAN, LaRaw
 ca. 1974 *The Jinghpaw Dictionary*. ms.
 ca. 1975 *A Dictionary of Modern Jinghpaw: Language Handbook Appendix*. ms.
- MARRISON, G. E.
 1967 *The Classification of the Naga Languages of North-east India*, 2 vols. London: SOAS.
- MASPERO, H.
 1946 Notes sur la morphologie du tibéto-birman et du munda. *BSLP* 43: 155-185.
- MATISOFF, J. A.
 1969 Verb concatenation in Lahu. *Acta Linguistica Hafniensia* 12(1): 69-120.
 1972a *The Loloish Tonal Split Revisited*. Berkeley: Center for Southeast Asia Studies, University of California.
 1972b Lahu nominalization, relativization, and genetivization. In Kimball (ed.), *Syntax and Semantics* 1: 237-257, New York: Academic Press.
 1972c Tangkhul Naga and comparative Tibeto-Burman. 『東南アジア研究』10(2): 271-283.
 1973a Tonogenesis in Southeast Asia. In L. Hyman (ed.), *Consonant Types and Tone*, Los Angeles: University of Southern California.
 1973b *The Grammar of Lahu*. Berkeley: University of California Press.
 1976 Lahu causative constructions. In M. Sibatani (ed.), *Syntax and Semantics*, vol. 6, New York: Academic Press, pp. 413-442.
 1978a *Variational Semantics in Tibeto-Burman*. Philadelphia: ISHI Publications.
 1978b *Linguistic Diversity and Language Contact in Thailand*. ms.
 1980a Stars, moon, and spirits: bright beings of the night in Sino-Tibetan. 『言語研究』77: 1-45.
 1980b *The Languages and Dialects of Tibeto-Burman*. ms.
 1983 God and the Sino-Tibetan copula. Circulated at the 16th S-T Conf., Seattle.
- MICHAILOVSKY, B.
 1974 Hayu typology and verbal morphology. *LTBA* 1: 1-26.

- 1982 *La Langue Hayu*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- NAGANO, Yasuhiko
- 1978a Preliminary remarks to rGyarong dialectology. Circulated at the 11th S-T Conf., University of Arizona, Tucson.
- 1978b *A note to the rGyarong Tsangla body part terms*. ms.
- 1979a A historical study of rGyarong initials and prefixes. *LTBA* 4(2): 44-67.
- 1979b A historical study of rGyarong rhymes. *LTBA* 5(1): 37-47.
- 1980 *Amdo Sherpa Dialect*, Monumenta Serindica 7. TUFS.
- 1982 A historical study of gLo Tibetan. 『国立民族学博物館研究報告』7(3): 472-513.
- 1983 *A Historical Study of the rGyarong Verb System*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- 1984a Preliminary notes on gLo-skad (Mustang Tibetan). In G. Thurgood *et al.* (eds.), *Linguistics of the Sino-Tibetan Area (Festschrift for Paul K. Benedict)*.
- 1984b A Manang Glossary. *Monumenta Serindica* 12: 203-234, TUFS.
- 長野泰彦
- 1984 「ギャロン語の方向接辞」『季刊人類学』15(3): 1-52.
- 西 義郎
- 1977 「Tamang 祖語の再構をめぐるいくつかの問題について」『鹿児島大学教養部史学科報告』26: 53-68.
- NISHI, Yoshio
- 1980a Classification of Some Tibetan Dialects of Nepal. Handout at the 1st Annual Conf. of the Linguistic Society of Nepal, Kathmandu.
- 1980b *A Comparative Word-List of Tamang, Gurung and Thakali*. ms.
- 1982a A Brief Survey of the Linguistic Position of Ghale. Circulated at the 15th S-T Conf., Peking.
- 1982b *Swadesh 100 Word-list for Some Languages of the Mon-pa group*. ms.
- 西田龍雄
- 1957 「チベット語動詞構造の研究」『言語研究』33: 21-50。
- 1960 「カチン語の研究」『言語研究』38: 1-32。
- 1970 『西番館譯語の研究』京都: 松香堂。
- 1973 『多續譯語の研究』京都: 松香堂。
- 1978 「チベット・ビルマ諸語と日本語」『岩波講座日本語 第12巻』岩波書店, pp. 227-300。
- OSBURNE, A.
- 1975 *Transformational Analysis of Tone in the Verb System of Zahao (Laizo) Chin*. Ph.D. dissertation, Cornell University.
- PLANK, F. (ed.)
- 1979 *Ergativity*. New York: Academic Press.
- PLANK, F.
- 1979 Ergativity, syntactic typology and universal grammar. In Plank (ed.), *Ergativity*, New York: Academic Press, pp. 3-38.
- 瞿 霽堂
- 1982 「嘉絨語動詞の人称范畴」S-T Conf., 北京 (1983 『民族語文』4: 35-48に再録)。
- 1984 「嘉戎語概況」『民族語文』2: 67-80。
- READ, A. F. C.
- 1934 *Balti Grammar*. London: Royal Asiatic Society.
- RICHTER, E.
- 1966 *Tibetisch-Deutsches Wörterbuch*. Leipzig: Veb Verlag Enzyklo pädie.
- ROERICH, G. DE
- 1933 The Tibetan dialect of Lahul. *Journal of Urusvati Himalayan Research Institute* 3: 83-190.
- 1958 *Le parler de l'Amdo*. Rome: Is. M.E.O.

- RÓNA-TAS
1966 *Tibeto-Mongolica*. The Hague.
- ROSTHORN, A. VON
1897 Vokabularfragmente ost-tibetischer Dialekte. *ZDMG* 51: 524-533.
- 佐藤 長
1978 『チベット歴史地理研究』東京：岩波書店。
- SHAFER, R.
1950 Classification of some languages of the Himalayas. *Journal of Bihar Research Society* 36: 192-214.
1966, 67, 74 *Introduction to Sino-Tibetan*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- SHAHA, B. N.
1884 *A Grammar of the Lúshái Language*. Calcutta.
- SHAKABPA, Ts. W. D.
1967 *Tibet—a political history*. New Heaven: Yale University Press.
- SRESTHACHARYA, I.
1981 *Newari Root Verbs*. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- STERN, Th.
1963 Provisional sketch of Sizang (Siyin) Chin. *AM* 10: 222-278.
- 孫 宏开
1962 「羌語概況」『中国語文』1962(12): 561-571。
1981a 『羌語簡志』北京：民族出版社。
1981b 「羌語動詞的趨向范疇」『民族語文』1: 34-42。
1982 『独龙語簡志』北京：民族出版社。
- 孫 宏开 *et al.*
1980 『門巴，珞巴，僂人的語言』北京：中国社会科学出版社。
- Taraon
1963 *A Dictionary of the Taraon Language*. Shillong.
- THARCHIN, G.
1960 *Tibetan Syllables*. Kalimpong: Tibet Mirror Press.
- THOMAS, F. W.
1948 *Nam*. London.
1957 *Ancient Folk-Literature from North-Eastern Tibet*. Berlin.
- THODAM, P. C.
1979 Conjoined structures with /əmächung/ in Meitheiron. *LTBA* 4(2): 122-129.
- THURGOOD, G. W.
1977 Lisu and Proto-Lolo-Burmese. *Acta Orientalia* 38: 147-207.
- TSUNODA, T.
1982 A Re-definition of 'Ergative' and 'Accusative'. Circulated at the 13th International Congress of Linguists, Tokyo.
- WALKER, G. D.
1925 *A Dictionary of the Mikir Language*. Shillong.
- WATTERS, D.
1973 Clause patterns in Kham. In A. Hale & D. Watters (eds.), *Clause, Sentence, and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal* 1: 39-202, Kathmandu: S.I.L.
1975 The evolution of a Tibeto-Burman pronominal verb morphology. *LTBA* 2(1): 45-79.
- WATTERS, D. & N. WATTERS
1973 *An English-Kham Kham-English Glossary*. Kathmandu: S.I.L.
- WEIDERT, A.
1975 *Componential Analysis of Lushai Phonology*. Amsterdam: John Benjamins B.V.
1979 The Sino-Tibetan tonogenetic laryngeal reconstruction theory. *LTBA* 5(1): 49-127.

長野 嘉戎語の動作の様態を示す接辞

WEN, Yu (聞 宥)

- 1941 「川西羌語之初步分析」 *Studia Serica* 2: 38-71.
1943a 「汶川瓦寺組羌語音系」『華西協合大学中国文化研究所集刊』3: 293-308.
1943b 「汶川蘿藦寨羌語音系」 *Studia Serica* 3(2): 12-25.
1943c Verbal directive prefixes in the Jyarung language and their Ch'iang equivalents. *Studia Serica* 3: 11-20.
1944 「論嘉戎語動詞之人称尾詞」 *Bulletin of Chinese Studies* 4(2): 79-94.
1945 「理番後二枯羌語音系」 *Studia Serica*, 4 suppl.
1950 An abridged Ch'iang vocabulary. *Studia Serica* 9(2): 17-54.

WOLFENDEN, S. N.

- 1929 *Outlines of Tibeto-Burman Linguistic Morphology*. London: Royal Asiatic Society.
1936 Notes on the Jyarong dialect of Eastern Tibet. *TP* 32: 167-204.

山口瑞鳳

- 1968 「蘇毗の領界」『東洋学報』50(4): 1-69。
1969 「白蘭と Sum pa の rLaps 氏」『東洋学報』52(1): 1-61。
1971 「東女国と白蘭」『東洋学報』54(3): 199-292。
1977 「三十頌・性入法の成立時期をめぐって」『東洋学報』57(1/2): 1-34。
1983 『吐蕃王国成立史研究』東京：岩波書店。

中国科学院少数民族語言研究所（主編）

- 1959 『景頗語語法綱要』北京：科学出版社。